

絞殺者Q

遠藤正二朗

その男、中臣貞郎なかのみさたおは中年期に差し掛かろうと

している青年である。この名前は戸籍上の本名
 のだが、それとは別に、彼は「Q」という名
 を用意していた。

「Q」とは「キュー」と発音する。これは中
 臣貞郎の仕事上での通り名であり、彼が生業と
 する業界では、本名とは別にこうした通称を用
 意する伝統的風習があった。貞郎もその風習に
 乗っ取り、何週間も悩んだ末、大好きなテレビ
 番組の登場人物にあやかっつて、このアルファベ
 ット一文字の通り名を用意したのだが、彼が業
 界にデビューするころにはそうした伝統もすつ
 かり廃れていて、今だかつて中臣貞郎は他人か
 ら「Q」と呼ばれたことはなかった。

彼は仕事の打ち合わせの席などで、相手から

「Q」と呼んで欲しいと希望していたが、そも
 そもその通称を他人に語る機会もなかったため、
 当然のことながら願望が叶えられることは有り
 得なかった。

例えば打ち合わせの際、「貞郎さん？ もう通
 称なんて古い伝統も廃れたけど、もしかしてあ
 なた、もうとつくに通り名を決めてて、私たち
 の間柄ではそう呼んで欲しいと思ってる？ な
 らその通称を教えてくださいさる？」などと、相手
 が自分の意図を察知して訊ねてくれれば、躊躇
 も少なく主張や宣言もできるのだが、もちろん
 そんな都合のいいやりとりは、これまで一度も
 なかった。積極的に通り名を宣伝し、伝統的風
 習をみなに再認識させるという前向きな方法も
 あったのだが、彼にはそうすることがあまりに
 も面倒で、おっくうであった。

ふだんの日常において自己認識をする際、中

臣貞郎は「俺」であり「自分」であり、名前などを自覚することは極めて稀であった。しかし、仕事に取り掛かる際、「Q」という自称を大きく自覚し、たとえ誰が呼ばなくとも、自分は仕事においては「Q」という存在であると、彼は常にそう考えることで、名づけに費やした数週間の労苦を労うことにしていた。

この物語では、中心人物である中臣貞郎に敬意を表し、彼の名を「Q」と記すことにする。

Qは私鉄沿線のある町に住んでいた。この町は首都まで急行を利用すれば二十分ほどの距離に位置するベッドタウンであり、大手映画会社の本社と、その撮影所があることで知られていた。都会といえばそうとも言えるほどの交通量とそれなりの高層建築物が立ち並び、田舎といわれれば、たしかに駅から少々歩くと畑が見えるので間違いでもない。そんな微妙な賑やか

さの町に、Qは生まれたころから越すことなく、これまでずっと暮らしていた。

Qの住み家である木造一個建ての家屋は、駅や撮影所から徒歩で十五分ほどの住宅街にあり、そのすぐ裏手は私鉄の線路であった。

列車は大量の音と振動を撒き散らしながら線路を行く。急行は甲高くヒステリックなまでの風きり音を上げ、普通列車はより長い時間、規則的で激しい振動を生じさせ、人がそのそばで健全な精神状態で生活するには困難がつきまとう劣悪な環境を生む。しかしQにとつては生まれてからずっと住んでいる環境であり、また他人の家に長時間滞在するという経験も少なかったため、音や振動はあくまで彼の日常の一部であり、いまさら自分の住む場所に疑問を抱くこともなく、こんなものだと思っ受け入れていた。

Qは線路そばに建つその家に、一人で暮らし

ていた。両親のうち、仕事の師でもある父親はすでに他界しており、母はその伴侶の死後、ずっと遠くにある彼女の生家に転居していた。もう二十年近く、Qは古びた木造家屋に一人で暮らしていた。家屋は二階建てであり、それぞれの階が二つづつの部屋で区切られ、両親や父方の祖父母が健在だったころは手狭であったが、たった一人で住むには快適を越え広すぎ、Qは家の一階部分だけを自分の生活空間にしていた。二階には便所も風呂もなく、そのため彼はここ二十年で、階段を上ったその空間に、合計数十時間しか足を運んでいない。

二階へと上る階段の、ちょうど踊り場にあたる壁には、小さな窓が取り付けられていた。この窓は夕方になると、たつぷりと鈍い夕暮れの日差しを受け入れるのだが、線路側に面していることもあり、普段は閉ざされていることが多い。

かった。それでも週末の夜だけに限り、窓は十センチほど小さく開かれていた。この家が建てられてから四十年もの間、家の主がQに変わるずっと前から常にである。

その週末の夜も、西側の小窓は小さく開かれていた。窓の外は数十センチの隙間を隔て人の高さほどの塀があり、塀のすぐ外は線路であった。塀はブロック製の薄いものであり、防音効果もほとんどなく、そのため短い間隔で列車が行き交う度、Qの家は轟音と振動に晒されていた。

家が揺れる度、炬燵に入ったQの身体も微妙に振動したが、彼の視線はそれに動じることなく、ただ一点、居間の隅に置かれた大型のプラズマディスプレイに注がれていた。

ディスプレイには桃色の学生服姿の少女が映し出されていた。それは鉛筆画からコンピューターグラフィックに描き起こされたキャラクターであり、恥じらいの表情で画面に向かうQを、時折瞬きをさせながら静止していた。画面の下

部には長方形の、これもコンピューターグラフィックによって描かれたボードが表示されており、その中には、おそらく少女が発しているだろう台詞がこう書かれていた。

みなみ「貞郎さん…私…あの…その…ずっと以前から…えっと…その…」

なぜか括弧で閉ざされていないその文面は、どうやら少女の恋の告白文であり、ディスプレイの左右に設置されたスピーカーからは途切れ途切れ、「貞郎さん」を除いた文面と全く同じ音声が流れていた。

Qの右手にはゲームの入力装置であるパッドが握られ、対座するディスプレイに映し出されているそれは、TVゲームの画面であった。Qは無表情ではあったものの、指からは少量の水

分を分泌しつつ、少女の告白をじっと眺めていた。

いくつかの文面が表示され、それに伴う音声が発せられた後、画面の下部に三種類の選択肢と、ゆるやかに点滅する矢印が表示された。Qはそれを目で追い、眉間に深い皺を寄せた。ゲームの今後の展開を左右する重要な分かれ道を、自らの決断によつて決めなければならない。そのプレッシャーにQは緊張し、呼吸は多少だが荒くなつていた。

Qは普段、この家にずっと一人でいる。彼はある仕事を遂行する職業人であるのだが、それに従事するために長時間外出するのは一年三百六十五日中、多い年でも三十日未満に過ぎなかった。近所まで日用品買い物に行くことや、ゲームなどの購入に繁華街へ足を延ばすこともあったが、日常の大半はこの家のこの居間で、ゲ

ームやテレビを楽しむ毎日である。学校を卒業以来、ろくに他人と会うこともないQにとつて、ゲームが与える選択肢は数少ない知的な刺激であり、その緊張感に依存することで、彼は乏しくなりがちな感情をかるうじて維持することができていた。

Qが画面を食い入るように見つめていると、二階へと通じる階段の踊り場から小さな物音を感じ、それと同時に彼はビクンツと小さく痙攣をした。

その音は、列車の行き交う騒音や、ゲームから発せられている音声や音楽に簡単にかき消されてしまうほど小さく、まず聞き取れるものではないのだが、Qは緊張した面持ちで炬燵を出て階段の踊り場まで上がり、そこに落ちていた小石を拾った。わずかに開けられた窓の外から放り込まれたであろうその小石は、ありふれた

ものではあったが、表面には、白い油性マジックで「参」と書かれていた。目をやや細めると、Qは小石を台所のゴミ箱に捨て、流しで顔を洗った。

少し離れた居間からは、叙情的なTVゲームのBGMが相変わらず流れていたが、Qの耳はすでにそれを感じておらず、彼の意識は先ほどまで集中していた遊戯には向けられてはいなかった。

翌朝、Qは灰色のコートを着込み、自宅を後にした。彼の自宅には、玄関から門までの間に小さな庭があるのだが、まるで手入れがされておらず、雑草が生え放題になっていて、十日前に降った雪が未だにその白さを土に残していた。門を出て路地に向かうと、何もないゴミ捨て場に黒い影が動いた。

Qが目を細めてその影を追うと、それは小さ

な黒猫であった。黒猫はゴミ捨て場から近くの塀へ登ろうとしたが、その挙動は素早くとはいえず、不器用でやっとのことであった。じたばたと必死で塀を登る黒猫の姿を見て、Qは無様だと思い、薄笑いを浮かべた。

塀に登りきった黒猫は、まるでいままでの無様さを誤魔化すかのようにツンと頭を上げ、ゆとりを漂わせながら塀を歩き出した。その後姿を見つめつつ、Qは猫の尻尾が妙に短い事実に気づき、再び薄笑いを浮かべた。

Qは私鉄駅へと向かった。真冬の朝は空気も凍てつき、衣類で覆われていない顔面には痛いまでの寒風が吹きつけていた。線路沿いの路地にはQと同じく駅を指す人々の姿がぱらぱらと点在し、Qの視線は自分の少し前を歩く、恐らく休日の外出をこれからするのであるう、一組の家族に向けられていた。家族を見つめるQ

の目は細く、その目つきは鋭いと形容してもよい。しかし強い印象を与えるほどのものではなく、ありふれた、ただ目つきの悪い青年以上のものではなかった。

Qの視線は、家族からやがて見えてきた駅へと移り、彼は小さくため息をついた。

首都方面行き準急電車に乗り込んだQは、その車両の一番後ろ端の座席に腰掛けた。灰色のコートで覆われたQの体軀はやや痩せ型であり、身長は百八十cmを越える。背中まで伸ばした長髪をオールバックにして輪ゴムで縛っているのが外見上の特徴であったが、特筆するほどのものではない。その長身をできるだけ小さくし、Qは終点までの短い時間を眠ることで過ぎた。

電車を何度か乗り換えたQは、閑静な住宅街を歩いていった。冬にしては強い日差しが彼を照

らし、十分も歩くと額にはうっすらと汗が浮かびはじめていた。Qにはそれが鬱陶しく思えたため、コートやジーンズのポケットを何度か探ってみたが、汗を拭う適当な布は見当たらず、仕方なく袖でその行為を済ますと、険しい表情のまま、彼は住宅街を目的地へと急いだ。

しばらく歩いた後、Qは一軒の住宅前に立ち止まっていた。三階建ての住宅は、持ち主の豊かな経済的基盤を物語っていて、Qの住み家とは異なり、その外観も庭も細かな手入れが施されていた。門の表札には「和泉」と彫られ、Qはそのすぐ脇のインターホンを馴れた手つきで鳴らした。

Qはその住宅の居間に案内されていた。室内は洋風の作りで、客間には紅い絨毯が敷かれ、部屋のあちこちには皿や壺、そして人形などの国内外の様々な工芸品が飾られ、圧迫感をQに

与えていた。彼はコートを着たまま身体を小さくし、ソファに腰掛けていた。そして彼の対面には、紺色の着物を纏った小柄な女性が、やはりソファに身を置いていた。

両者の間に置かれたガラス製のテーブル上には、大小一つ一つの封筒が置かれていた。女性は老年に差し掛かった中年女性であり、Qよりずっと小柄で、銀縁眼鏡の奥から覗かせる瞳は小さいながら凜とした輝きを放ち、邸宅の主としてふさわしい品性を醸し出していた。それに比べてQはいかにも職にあぶれている貧相な青年然とし、対座する両者の関係は、封筒の存在も相俟って、借金の申し込みにきた青年と、それを受ける夫人のようでもあった。

「いらつしやいませ」

そう挨拶をしながら、客間に銀のトレイを持ったエプロン姿の若い女性が入ってきた。トレ

ーの上には紅茶のセットが置かれ、彼女はゆっくりとそのセットをテーブルに置き、Qへ視線と人懐っこい笑顔を向けた。

「いらつしやい」

入室の際に述べた挨拶と同じ意味の言葉を、今度は崩した語調で彼女はQに言った。しかしQは彼女に意識を向けることはなく、ただぼんやりとテーブルに置かれた紅茶セットを凝視するばかりであった。エプロン姿の女性は無表情になると軽く一礼し、退室した。

「インドのアッサムという紅茶よ。どうぞ」

夫人はそう告げると、カップに紅茶を注いだ。Qの視線もそれに注がれたが、表情はぼんやりとしたままであり、紅茶に対する興味は希薄そうであった。ティーカップを目の前に置かれても、彼はそれに手をつけようとはせず、今度はテーブルの上の封筒に視線を移した。

「猫舌だったかしら？」

「はいえ…はあ…」

夫人の問いに、Qは身体を小刻みに前後させながら答えると、仕方なくティーカップを手に取り、中身を一口すすった。

「どう？」

味についての評価を求めているのだろうが、一口すすっただけでは熱さしか伝わってこないため、Qはもう少し大量の紅茶を口に含んだ。

「あ…ええ…いいですよ」

そんなQの返事に、夫人は満足そうに薄く笑みを浮かべると、自分も紅茶を口にした。普段は線路側の自宅でTVやゲームソフトを消費し、できるだけ他人との接触を避けつづけているQである。夫人とのこうした日常的なやりとりは、どうにも苦手で、せめて電車でも通過すれば騒音で間が持つとも考えたが、高所得者たちが住

むこの高級住宅地にそんな騒音が鳴ることもなく、仕方なくQは紅茶が少し残ったティーカップを無言で凝視しつづけることで時を消費していた。

「参…ですよね。今日は」

Qはようやく自分から夫人に語り掛けた。夫人はティーカップを置くと、大小二つのうち、大きい方の封筒を取り上げ、それをQに手渡しした。Qは封筒の中身を少し覗くと、すぐにそれを自分の傍らに置き、残りの紅茶を一気に飲み干した。性急なその挙動に夫人は眉をしかめ、苦笑いを口元に浮かべた。

「できそう？」

「ウチ帰って…」あたり”付けてからですけど…多分…平気です”

「手が足りないときはいつでも行つてね」

「ええ…」

「まあ…貞郎さんなら、大丈夫でしょうけど」

「は、はあ…」

そんなやりとりを交わしながら、Qは目を軽く見開き、何か思い当たったかのような表情を浮かべた。

「和泉さん。期限は？」

「中の書類にも書いてあるけど…実施は四日後…期限は今日から一週間以内よ。」

「…了解です」

Qの声は本来甲高いのだが、他人との会話においては低く小さく、この和泉と呼ばれた夫人は常に集中力を用いてQの言葉を聞き取る必要があった。了解の返事はそのいつもの声より更に低く、力強かったが若干の気負いも和泉夫人には感じられた。

Qはソファからゆっくり立ち上がると、大きめの封筒をコートの内側にしまい込み、空いた

手でテーブルの上の小さめの封筒を取り上げ、それをコートのポケットに入れた。

「あら…もつとゆつくりしていけばいいのに」

「ええ…まあ…」

「用事でもあるのかしら？」

「はあ…まあ…」

曖昧な返事をする、Qはコートの内側に片手を入れたまま客間を後にした。和泉夫人はそんな彼の後ろ姿を見つめつつ、小さくため息を漏らした。

大きめの封筒を四つ折りにしたQは、それをコートの内ポケットに入れると、和泉邸の玄関まで歩いていった。夫人の見送りはなく、そのかわりに先ほど紅茶セットを運んできたエプロン姿の女性が、スニーカーを履くQに言葉を掛けた。

「愛想ないのね」

「いらねえよ。そんなもん」

女性に返事をするQの口調は、先ほどまでと比べるとずっと荒っぽく、声量も大きいため、声質の甲高さがより際立っていた。女性は丸い目を細め、Qに抗議の意を向けた。

「奥様、インドのお話とか、写真とか、いろいろ貞郎さんにしたかったのよ」

女性の言葉には険が込められており、それがQを苛つかせた。

「こつちはそれどころじゃねえんだよ」

声量こそ小さくしていたがQの言葉は汚く、女性の怒気を煽るのには充分であった。

「どうせゲームとかアニメで忙しいんでしょ」

「ふん」

反論もできず、やや乱暴な挙動でQは扉を開け、静かで居心地の悪い和泉邸を後にした。

その日の午後、Qはとある駅の便所にいた。

コートのポケットから小さい方の封筒を取り出すと、Qはその中身の一部を財布に移した。小さな封筒の中身は、百枚以上にも及ぶ一万円札であった。

和泉夫人はQに仕事を提供する仲介業者であり、三ヶ月から半年に一度、彼は彼女から先ほどのようなやりとりで仕事を引き受けていた。

Qは和泉夫人以外から仕事を受けたことはなく、また彼の父親もそうであった。

一回の仕事の報酬は常に百万円を越えていたが、そもそも仕事の件数自体が極少であるため、Qにとつては充分過ぎる収入とはいえなかったが、だからといって、彼はアルバイトなどをしたこともなく、生業以外に手を染めた経験は皆無である。彼の仕事は特殊であり、日常などで他人と接触をする機会を極力避けることが安全だったためにそうしていたのだから、Qの同業者には

生業以外の副業を持つている者も多数存在し、要領の問題ではあるのだが、半ばQは面倒な労働や社会的接触から逃れるための方便として、事情や理由を自分に言い聞かせ、納得する癖があつた。便所から出たQは改札を抜け、繁華街へと出た。

この繁華街は東洋一と呼ばれている電気街であり、平日の昼間ではあつたが、街路には人と車が溢れていた。Qは人ごみをそもそも嫌つてはいたが、賑やかなのは好きであるため、この繁華街に来るといつも憂鬱と高揚が渦を巻くのを感じていた。今日のように仕事を受け、手付金を受け取つたあと、常にこの街を訪れるのがQにとつての贅沢であつた。ゲーム、映像、音楽ソフト、そうした物がこの街には溢れている。決まつた買い物であれば、地元の私鉄沿線でも充分であつたが、そういったソフトを求め、

どこか自分と同種の趣味を持つた通行人や買い物客の佇まいを感じることに、彼の連帯感を満たしていた。

たとえば、あるゲームソフトがあり、その発売日だつたとする。そのソフトはゲームに対する理解よりも、別メディアであるアニメや漫画の趣味性が強いとより楽しめる傾向にある、購入対象者を非常に絞つた物であつたとする。地元のお店ではせいぜい一、二本しか入荷しないはずだが、この街の専門店であれば十本以上も平積みで店頭に並んでいる。その山の一番上を手にしてパッケージを確認した際、背後から別の客がやはり同じソフトを山から手に取る。

つまりこの二人はそのソフトを通じ、おそらく公約数的に同じ趣味趣向を持つた者同士であることを互いに認識し、それを確認するのに敢えて言葉を用いらない点が想像力を刺激する。

これは単なる生活必需品の買い物では得られない感覚であり、対象者を絞った趣味の買い物でしか得られない、Qにとつて快感が伴う認識作業である。もちろん、手にしたソフトの山を前後の客が素通りし、結局その十数分間で購入したのが自分だけということも多いのだが、その際には自分が少数派のいわゆる「わかつた客」であり、他人とは違う存在だと認識する。Qは特殊な仕事をする者であり、そうした優越感はあるに備わっているはずであるが、あまりにも仕事特殊すぎ、誰かまわずそれを宣言できない事情があるため、買い物で得られる自己確認は、世間と自分の距離や自分が一般人ではないと再認識するのにとても都合がよかった。

繁華街でいくつかの買い物を買ませたQは、片手に紙袋を下げ、地元である私鉄駅まで戻ってきた。帰宅途中、彼は踏み切り近くのコンビニ

二エンスストアに入ると、まずレジに視線を向けた。

レジにはアルバイトとおぼしき若い男女がいた。Qの視線は女性の方に向けられており、やや茶色に染めた髪をショートカットにしたその女性は、目が小動物のように顔に対して大きく、可愛らしい容姿をしていた。Qは適当な弁当とペットボトルのお茶をつかむと、それをそのままレジに置いた。

「お弁当、あたためますか？」

外見にしてはやや低い声で、店員である女性
はQに言った。

「は、はい」

返事をしながら、Qは財布を取り出し、女性の弁当を電子レンジに入れる挙動をつぶさに観察していた。そのとき、男性店員は別の客の応対をしていたのだが、Qはそんな事実に関心

かりの注意しか向けていなかった。

他にレジに並ぶ客もいないため、弁当が温まるまでの数十秒、Qと彼女の間には無言の時が流れていた。その間、代金のやりとりなどはもちろんあったのだが、Qはあまり不審がられない程度にショートカットの店員に見とれていた。

この女性は、半年前からこの店で働いている。店長である中年男性から品物の配置を聞いたり、隣のレジの青年からレジの操作を聞いたり、彼女が働き始めたころからQはその存在を知ってはいたが、大して意識はしていなかった。しかしある出来事をきっかけに、彼はこの女性に強い印象を受け、それ以来買い物たびに彼女を観察し、感じることに小さな喜びを見出していた。名札にはマジックで「湊みなと」と書かれてあり、その名前の語感もQは気に入っていた。Q

は女性との交際も肉体経験も皆無である。湊という女性に惹かれてはいたが、その感情をどう行動にしていいかもわからず、取り敢えず見て感じることで一応の満足を得ることが、Qにとっての日課であった。

帰宅したQは封筒に入っていた残りの札束を取りだし、居間の押し入れ奥の金庫にそれを通じた。コートを脱ぐと、小さくため息をつき、四つ折りにした大きめの封筒をポケットから炬燵の上に放り投げ、もう一つ、今度は長めのため息をついた。

時刻はもう夕方であり、辺りはすっかり暗くなっていった。Qは弁当を平らげた後、帰宅途中に買ってきたTVゲームでしばらく遊び、それに飽きると今度はDVDソフトを鑑賞し、トイレで排泄を済ませたころには終電も通過した深夜であった。

Qは先ほど炬燵の上に放り出した封筒に手をやり、中身を取り出した。それは数枚の手書き書類と三枚の写真であった。書類を読み、写真をしばらく眺めたQは、それらを封筒に戻し、缺で細かく裁断し、流して火に掛け灰にした。薄つすらと額に浮かんだ汗を水で流したQは、深呼吸をすると汚れた手ぬぐいで顔を拭き、その饅えた匂いに顔を思いつきりしかめた。

滅多に上ることのない二階への階段を上りきると、Qは畳敷きの和室に正座した。四畳半の小さなその和室には、桐の箆笥が一つ置かれていた。他に家具がなく、狭さの割りにがらんとしていた。明かりもなく、障子も閉めきられた暗黒の中に、Qはじっとたたずんでいた。しばらくすると彼は小さく息を吐き、箆笥の一番下の段を開け、中から油紙の包みを丁寧に取り出した。

油紙の中身は紫色をした絹布であった。きめが細かく肌触りのよさそうなそれは、長い方の一辺が一・五メートルほど、短い方の一辺は三十センチメートルと、一見ただけでは用途も分からない長方形に裁断されていた。Qは絹布を丁寧な拳動で紐状に巻くと、自分の首に一巻きし、軽く両側を引いた。絹紐は小さな音をあげながら圧力を首全体に与え、Qの器官は圧迫され、酸素の吸入を制限した。紐を引く力を緩めたQは、仕方なさそうに苦笑いを浮かべ、開けたままになっている箆笥から今度は石鹸を取りだし、布状にほどいた絹全体にそれを軽く擦りつけた。

そうした一連の作業は動きに無駄がなく、おそらく彼がこれまで何度もこうした事を繰り返してきているであろう証であった。無表情のQはもう一度自分の首に絹紐を巻きつけ、それ

を締め付けると今度は音を全くたてずに呼吸を
圧迫し、その結果に彼は薄ら笑いを浮かべ、満
足そうに両肩を上下に小さく振るわせた。

書類の中身を読む限り、今回もこれまでと同様、
段取りさえ間違えなければ心地よく、すんなり
と済む仕事だろう。大したトラブルが入りこむ
隙間も少ない。この仕事を終えれば、また何ヶ
月かは自宅に籠りいつもの生活を満喫できる。
波風もなく、平穏でいい生活だ。仕事さえしく
じらなければこの暮らしをいつまでも続けてい
くことができる。そう認識すると、Qはたまら
なく嬉しくなり、苦しい呼吸の中、喜びだけが
彼の心を満たしていた。

Qは物心ついた頃から、生業に従事するための教育を父親から受けていた。具体的な技術である対象への調査や接近、危機回避方法などは先人であり師でもある父から伝授され、母はそうした日常を補佐するために存在していた。父の父、つまりQの祖父も同様の仕事に従事し、彼の家は昔より、ずっと同じ仕事を生業としていたと、Qは父から聞かされていた。どのくらい昔？ と幼いころ彼は祖父に尋ねたが、祖父は髻を結っていたころは庄家だった、と語った。せいぜい昔といつても曾祖父の時代からだともQは思い、やはりよく考えてみるととても昔からだと感じた。

Qの生業は、社会において非合法的な仕事である。依頼が発生し、それを引き受けることでこのビジネスは成立する。Qの家、中臣家の他に

も、十数家がこうした仕事を生業としており、いずれも社会とは一定の距離を保ち、破綻の危機を何度も回避しつつ今日に至っていた。Qが今回仕事を受けた和泉家は、遂行者と依頼者を仲介する立場に位置し、現在では直接両者が仕事のやりとりをすることはない。これは秘密漏洩を未然に防ぐため、自然にできたシステムなのだが、そのためQは、これまでやった仕事のいずれの依頼者とも会ったことがない。

毎回渡される書類には対象者の細かい経歴や依頼の経緯などが記されている。経歴は重要な項目なので記憶するようにしていたが、依頼経緯に対しては、あまり興味も関心もなかった。

対象者に接近し、仕事を遂行するための具体的な労苦に、依頼理由はなんの軽減もなさないからだ。つまり、仕事の対象者が、どういった事情を持った者であるのかすら、Qは大して理解

をしていなかった。証拠をできるだけ残さず業務を遂行し、その報酬によって生活が成立する。この単純な仕組みの上にQは存在し、その他の、例えば依頼の受諾や証拠隠滅、根回しなど的一切は和泉家が担当する。Qは遂行の手順以外にも考える必要がなく、彼自身考えたくもなかった。

Qが和泉邸を訪れた日から、四日が経過しようとしていた。その間、彼は毎日昼前に起き、インスタントラーメンを食べ、TVゲームやDVDソフト、漫画やTV番組、CDを楽しみ、夕方になると踏み切り脇のコンビニエンスストアまで出かけ、ショートカットの店員を眺めながら弁当をあたためてもらい、家に戻ってそれを食べた後は深夜まで昼と同じように娯楽に興じ、それに飽きるとそのまま炬燵で眠りに落ちる、といった毎日を繰り返していた。

彼が楽しむDVDやTV番組の内容は大半がアニメーションであり、中には幼児を対象にした作品までもが含まれていた。鑑賞するCDも、そうしたアニメーションのサウンドトラックや、出演声優のボーカルアルバムなどであり、四日前の和泉邸からの帰りも、彼はDVDを五枚、TVゲームを七本、CDを九枚、漫画や書籍を十七冊も買いこみ、それを消費するのに昼夜を当てていた。もつとも、それら全てを完全に内容まで理解し、楽しむためには四日は短く、未開封のソフト類は購入した全体の二割に及び、それらは紙袋に入ったままであった。また、消費したソフト類は居間の床や炬燵の上に散乱し、弁当を食べた後の容器やペットボトルと区別されず、雑然と放置されていた。

クリアされていないTVゲーム、内容を他人に説明しようにも鑑賞した途端に細部を忘れ、

そもそも説明する相手もおらず、ただぼんやりとした気分を刺激してくれるだけの映像や音楽メディア。そして肉体の活動を維持するため、仕方なく消費されていく弁当と飲料。たまの排泄と自慰、疲労の結果による睡眠。それがQの、ここ四日間の全てであった。

五日目の朝、Qは部屋中に散乱していた弁当とペットボトルの容器を片っ端からゴミ袋に入れ、それを玄関先に放り投げた。

散乱していたソフト類は段ボールにしまい、部屋の窓を開け、外気とよんだ部屋の空気をたっぷりと循環させ、掃除機を乱暴にかけるQは、ただ無表情であった。部屋の掃除を済ませた彼は、五日間着たままであった衣類を全て脱ぐと、痩せた体に寒気を感じつつ、慌てて風呂に入った。湯船に浸かりながら、Qは自分がQという通称を持つ、一人のプロフェッショナル

であるという自覚をだんだんと強めていった。

午後、曇り空のもと、Qは自宅近所の路地を歩いていった。ふとゴミ捨て場に目をやると、いつかの黒猫がぼつんとたたずみ、せつせと毛繕いをしていった。その様子をQは鋭い眼光で凝視し、ペロリと舌で唇を濡らした。黒猫はQを見上げ、後ろに小さく跳躍すると身構え、低い唸り声を上げた。小さな黒猫の威嚇に、Qは薄笑いを浮かべると軽やかな足さばきで駅へと向かった。

電車に乗ったQは高揚した気持ちを抑えることなく、コートのポケットに両手を入れたまま座席を大きく占領し、明るい表情で乗客をキョロキョロと眺めていた。

準急電車で首都のとある駅までやってきたQは、大手デパートの入り口にいた。もう高揚感はずっかりなくなつて、その表情はどこもなく

憂鬱そうであった。十分ほどたたずんでいると、紺色のセダンカーが彼の前で停車した。車の窓はスモークがかかっており、中の様子はほとんど伺えない。しかしQはさも当然のごとく、その車の後部座席に乗り込んだ。

車の運転席には、一人の中年男性の姿があった。年齢はQより一周りほど上で、皺の多い灰色のスーツを着こんだその男は、後部座席にいたQに軽く振り返えると小さな包みを手渡した。

「貞郎さん。お久しぶりですね」

中年男性の眼光はQよりも鋭かったが、低くつぶれた鼻と下膨れの輪郭のため、柔和そうな雰囲気も発しており、声も低く穏やかであった。

この男も和泉夫人から仕事を提供してもらっているQの同業者である。しかしその仕事は対象者への仕事の遂行ではなく、主に実行にあた

つての情報収集や、現場のセッティング、実行者の移送などである。Qはこれまでに何回か、この男の運転で現場へと向かった経験がある。しかし未だにその名前などは知らず、面倒なため聞いたことすらなかった。

「もう仕込みは終わってるんですか？」

そう質問するQに、男は車を発車させながら答えた。

「ええ。この四日ではつちりです。つーか、奴さんこごとと、ホテルでカンヅメですから」

「カンヅメ……」

Qには男の言葉がいまひとつ理解できず、その部分を反芻した。

「ああ……作家先生つてのは、締め切りが近くなると、出版社が用意したホテルに籠って書き物をするところがあるんですよ」

「……なら……出版社の人間もいるんじゃない？」

「はい。場合によっちゃ、ずっとつきつきりですね。ですから仕込んでおきました。夕方五時から明日の朝までは、編集者はいません。出版社に戻ってます。奴さんはホテルで一人きりです」

締め切り前の作家と編集者。この両者をどういった手はずで切り離すことに成功したのか、Qは疑問を感じたが、質問するほどの興味は湧かなかった。とにかく、自分が相手を仕留めるまでの仕込みはこれまで通り完璧であり、仕事において越えるべき難事は少ないのであろう。そうした納得をすると、彼は先ほど手渡された包みを開け、その中身を取り出した。それは、二つの小さな鍵であった。

「この鍵は…?」

「奴さんが泊まってる部屋と、ホテルの非常階段の鍵です」

その男の言葉にQは小さく頷くと、鍵をコ

トの内ポケットにしまいこんだ。

「貞郎さん。やるのは…」

「ええ…もちろん今夜です」

Qの返事に、男は笑みを浮かべた。

「そりゃよかった。いやね。今度の仕込みは手間がかかって、まあ貞郎さんなら奴さんが誰としようが、確実に仕事は果たせるとは思いますがどね」

男にそうおだてられたQは、だが表情を変えず、返事をする事もなかった。ミラーに映った憂鬱そうなQの表情を認めると、男は再び笑みを浮かべた。

「和泉の奥様が言っていましたよ。貞郎さんに仕

事任せると、安心できるって。神大じんだいさんなんか

だと、やっぱおっかないって」

男の言葉に、やはりQは返事をせず、仕方な

く窓の外をぼんやりと眺めた。

「やっぱあれですかね。他の人と違って、貞郎さんはなんつーか、あれですか？ 肝が座ってるってゆーか、仕事が大胆ってゆーか」

走行中の車内で、男とQはずっと言葉を交わしていた。しかし、両者の発言の比率は、まるで対等ではなく、目的地であるオフィス街に着いたころには、Qはすっかり疲弊し、車を降りる拳動もわずかではあるが乱暴であった。

「じゃ、頑張ってくださいね。明日の朝刊、楽しみにしていますよ」

男はそう言い残し、車から降りたQに最後の言葉をかけ、再び車を発車させた。走り去る紺色のセダンを凝視しながら、Qは小さく舌打ちをした。

Qが到着した街は、ビルが林立するオフィス街で、その大半は出版社か書籍問屋や大型書店

であった。朝からの曇り空は、昼過ぎの現在でも変わりなく、分厚い雲が空を覆っていた。Qはとあるホテルの前までやってくると、それを見上げた。

ホテルは街のメインストリートから外れた問屋街にひっそりと建てられていた築三十年以上の古い建物であり、四階建てと小さな宿であった。

ポケットに両手を突っ込んだQはホテルの周りをぐるりと一周し、建物の外観や隣の建物をじっくり観察した。ホテルの裏には同じ高さのビルが建ち、そちらに面したホテルの壁には非常階段が取り付けられていた。その存在を発見したQは満面に笑みを浮かべ、全身を軽く振るわせた。あの中に仕事の相手がいる。そして自分はそのへたどり着くための鍵をもうすでに入手している。やはり今回の仕事も楽勝だ。やや

思いこみがちに、Qは自分にそう言い聞かせていた。

それから後、ホテルから三分ほど歩いたメイ
ンストリート沿いにある漫画喫茶にQの姿はあ
った。二時間ほど漫画の単行本を読みふけた
Qは、それから店内の壁際に設置されてあるパ
ソコンの前までやってきた。こうした店の中
にはインターネットカフェとして利用できるもの
もあり、Qの眼前にあるパソコンも、そうした
用途のために店が用意したものであろうが、Q
はパソコンのディスプレイを数分凝視したあと
首を数度降り、それに触ることなく別の漫画本
を棚から取り出し、テーブルに戻った。

Qの仕事は依頼された相手を殺害することに
ある。その実行は夜中に行われることが多い
た。そして、現場に訪れるのは実行する日のみ
であり、事前の下見は一切行わない。しかしそ

の土地の空気に馴れ、たたずまいを自然にする
ため到着は実行時間の六時間以上前と決めてい
た。これは、彼に仕事の手ほどきをした父に教
わった段取りの一環であり、これまで十年以上
に渡って行った二十二件の殺害においても同様
であった。

漫画本を読み始めて二時間ほどが経過した。
Qのテーブルには数冊の漫画本が積み重ねられ、プ
ラ
スチックのコップにはジュースが注がれていた。
彼が読んでいたのは全四十八巻にも渡る長編野
球漫画であった。その存在はこれまでもよく
知っており、いくつかのエピソードを読んだこ
ともあったが、一巻から続けて読んだのは初め
てであり、そもそもQはスポーツをジャンルと
した作品はあまり興味がなかった。新鮮な
気持ちで読むことができた。

現在彼が手に取っているのは十八巻。殺害実

行までこの店にいれば、全巻を読破し、現在も連載中の続編を読むことも可能であろう。しかしそこまで長時間一軒の店に居続けることは普通に考えれば不自然であり、若干ではあるが不安である。そんな葛藤を紛らわすため、Qがふと店の入り口に注意を向けると、レジで店員とおぼしきエプロン姿の男性と制服姿の警官が二名、なにやら言葉を交わしていた。

Qとレジの間には数メートルの距離があり、店内には小さいボリウムながら有線放送が流れていたため、Qに店員と警官の詳しい会話はわからなかったが、どうやら店員は警官たちへ何かの状況を説明しているようであった。しばらくすると二名の警官は店員の案内で漫画棚まで移動し、そこで店員の説明を聞いていた。おそらく漫画本が盗難でもされ、警察に通報したのだろう。Qはそう判断するため息をつき、

漫画本を棚に返却し、レジに別の店員がいるのを確認した後、料金を支払い漫画喫茶を出た。なんにしても、仕事の実行日に警官から姿を見られるのは都合が悪い。後々の段取りに思わぬ障害を呼ぶ隙間を生みかねない。しかし、これまでの仕事で、自分に関係ないとはいえ警官の登場で行動を決定するのはQにとって初めての経験であった。彼はなんだか不機嫌になり、少々不安を覚えた。

店外に出ると、辺りは暗くなりかけていた。Qは腕時計で現在の時刻を確認すると、ポケットに手をつ込み、仕方なさそうに街をぶらぶらとろついた。

曇り空から雪が舞い落ち、大型書店も閉店の準備をはじめ、街の人通りも少なくなり始めた頃、繁華街の外れの、あの古びたホテルからすぐ近くの居酒屋にQはたどり着いていた。狭い

店内のカウンター席に、身体を小さくして腰掛ける彼の前には、ほとんど手をつけていない瓶ビールと、焼き鳥の盛り合わせや漬物、コロツケにソーセージなど、食べかけの料理がいくつも置かれていた。

こうした酒場に来た経験がQにはほとんどなく、酔客の喧騒に苛立ちながら、彼は黙々と眼前的料理を消費していた。警官の登場から端を発した彼の不機嫌は、喧騒により倍化されていた。仕事の遂行予定時間は深夜零時。現在の時刻は夜七時であり、まだ五時間は時間にゆとりがある。精神のバランスに変調をきたすことは、仕事に必ず致命的なミスを生む。そう教え込まれていたQは、早めにこの店を出て、どこか静かで深夜営業をしている喫茶店か、騒々しいが情緒を安定させられるゲームセンターにでも移動しようと考えていた。こうしている間にも店

の扉が開き、客が次々と入店してくる。いずれ席が足りなくなり、このカウンターも満員になるだろう。酔客の愚痴を間近で聞きつづけることだけは避けたいQであった。

すると、彼の肩がポンツと小さく叩かれた。心臓が縮み上がり鼓動が急速に早くなるのQは自覚した。なんだ？ どうして肩を叩かれる。馴れ馴れしい拳動だ。知り合いがこの店にいるわけがない。そもそも俺の知り合いは仕事の関係者ばかりで、彼ら彼女らは外で自分を見つけても声をかけてくることはない。誰だ？ さっきの警官か？

激しく混乱しつつ、眉間に皺を寄せ、口をへの字にしながら、Qは自分の肩を小さく叩き、右隣に腰掛けた者の姿を睨みつけた。

「あ……う……うあ……」

相手の顔を見たQは小さなうめき声をあげた。

白髪交じりの頭髪、えらの張った四角い骨格、
小さく垂れた目。それは数日前和泉邸で渡され
た封筒に入っていた写真と同じであり、今回彼
が仕事を遂行する相手、小説家、田沼幸司の顔
であったからだ。

四

「一人で呑んで楽しんでものですか？ まあ僕も人のことは言えやしないけどねえ」

田沼幸司はすでに酔っていた。彼はカウンタ―越しの板前に焼酎のお湯割りと漬物の盛り合わせを頼むと、度の強い黒縁の眼鏡の奥から、Qにとろんとした視線を向けた。

「は、はあ……」

Qはまるで状況の把握ができず、ただ曖昧に言葉を返した。なぜ田沼幸司が自分に話し掛けたのか、彼は一体自分になにをしようとしているのだろうか。まさか、こちらの計画を知つての行動なのだろうか。とにかく、当面は相手の話を聞き流し、この異常事態が発生した要因を分析しよう。場合によっては決行を早めるか、そのものを延期する必要があるだろう。こんな事態が発生するとは、彼も全く想定してお

らず、そのため激しく困惑していた。場合によっては最悪の結果になるかも知れず、それば自身の死を意味していた。

しばらく田沼の話を聞いてみると、どうやらこの店を訪れたのも、自分に話し掛けてきたのも全くの偶然であり、夕方から呑んだ梯子酒の結果であることが、ぼんやりではあるが判明しかけてきた。まずその事実には安心すると同時に驚愕していた。田沼はQに、自分がこの近くのホテルに仕事で宿泊していることと、その仕事に行き詰まり、ついつい今夜は酒を呑みすぎていると語った。

「こうねえ…呑んでると構想力が高まるのですよ。でもねえ…醒めると忘れてるわけですよ。だから覚えてるうちに書いて、醒めてから乱れている箇所を訂正するわけ。ところが、乱れているそのものが、アイデアの根源だったとき

はね。そりや醒めてから唾然とするよ。どーしよこれ、いいけど全然使えねえよって」

支離滅裂ながら、田沼の言は芝居がかっていて、Qがこれといった返事をせずとも、しゃべるのをやめることはなかった。

田沼幸司は小説家である。新聞社勤務を十年経たのち、彼は工場を転々とし、主に労働組合の実態について働きながら実地取材を続けるといった、少々風変わりな経歴を持つ。その後社会派ポライターとしてデビューし、労使間にまつわる不正を暴きつづけ、その時代にはよくテレビのドキュメンタリーなどにもコメントターとして出演をしていた。現在は小説家として企業物といわれるジャンルを執筆している。知名度はそれほど高くはないが、いわゆる硬派作家として、常に問題作に挑みつつづけている。

これは、Qが和泉邸で受け取った封筒に入っ

ていたレポートに書かれていた田沼幸司の簡単な紹介文の内容である。レポートはその他にも彼の経歴についてこと細かく書き記されており、Qはその内容を全て一読しただけで記憶していたが、具体的遂行においてあまり重要な項目ではなかったため、記憶層の奥にしまい込んでいた。右隣に座るこの男の言葉を聞くと、やはり彼は田沼幸司本人である。そう認識すると、Qは記憶をフル回転させ、田沼幸司の個人情報思い出した。

「君は、なにをしてる人なのかな？ 学生？」
まさか殺人を生業として、今日はあなたを殺しに来ました。と言えるはずもなく、Qはその質問に曖昧な笑みを浮かべた。

「まあ…そんなところです」
「そんなとこって、学生かそうじゃないかはシロク口だよ。そうか、そうじゃないかのどち

らかですよ。そんなぼんやりとした返事はない
でしょう?」

「あ、いや…学生です。ただ…あまり学校には
行つてなくて」

「ああ…そう…ふーん…そうか。そうですか。
なるほどねえ…それじゃ胸張つて、はいとは言
えないねえ…絡んで悪かつたねえ」

自分でもいい回答をした。納得する田沼を横
目で見ながら、Qはそう思い、初めて自分から
言葉をおにした。

「田沼さんは、いまだんな小説を書いてるんで
すか?」

その質問に、田沼は目を大きく見開いた。な
ぜそんな反応をするのかQには理解できず、し
ばらく無言の間が両者を包んでいた。

「あれ? やつぱり変ですよ」

「な、なにがです?」

「だつて私、君に名乗つてませんよ」

自分は彼の好物から乗っている車の車種まで
知つている。そうした前知識と、正体不明であ
つたこの人物が田沼であると確信した自身が、
Qの口を滑らせていた。確かに彼は小説家だと
告げたが名乗つてはおらず、それほどの有名人
家ではない。しかし機転を利かせ、難事を潜り
抜ける修練は、幼いころより父の元で積んでき
たQである。彼は表面上はまったくうつろたえず、
すんなりと田沼の疑問に答えた。

「十年前:土曜日の夕方:シャトルスコープつ
て報道番組、僕よく見てたんですよ。出てたで
しょ田沼さん。さつきから訊ねようと思つてた
んですけど、ついつい名前が先に出て、失礼し
ました」

修練の賜物とはいえ、自分がこつもすらすら
と資料に書いてあつた事実をもとに、嘘をよど

みなくつけることがQには信じられなかった。意外と自分は他人と表面でしゃべることができない才能があるのではないだろうか？ そんなことを考えていると、会話は思わぬ方向に向かい始めた。

「若いころからあんな番組見てたなんて、今時の人じゃ珍しいですよ。いやぁ…なんかね、見たときからピーンと来てたんですよ。実は」

田沼はQが自分が出ていた番組の視聴者であった事実を知り、彼にしつこくその当時の感想を求めた。悪いことが言えるはずもなく、また会話に自信をもちつつあったQは、田沼のコメントが的確で同意していたと、見てもないテレビ番組の感想をべらべらと述べ始めた。事実、彼はその当時裏番組として放送されていた三十分物の、学生が妖怪と戦うアニメーションを見ていたため、シャトルスコープという報道番組

は微塵も見ることがない。しかしQの話術は巧みで、田沼はすっかりQを気に入ってしまった。「見所がありますよ君は！ 若いうちから社会問題に関心を向けなければ、この国はじき滅んでしまっからね」

その意見にはまるで同意できなかったが、Qは話題を合わせつつ、少々自分の話術が相手の機嫌を取りすぎている事実気付き、あまり関心しない事態になりつつあることを感じていた。これから仕事をする相手に気に入られても、なんの意味もない。むしろ遂行に支障をきたすだけだ。一体自分はここでなにをやっているのだろう。憂鬱になりかけたQに田沼は焼酎のグラスを見つめつつ、ある言葉を口にした。

「なにかを作るってことは、大切なんですよ。使うことや減らすことは簡単で楽しいことなんです。だけど作ったり生み出す者がいなければ、

それでもできません。社会人としての責任を果たすということは、すなわち生産に携わることなんです。止め金でも小説でもいい。とにかく使えたり楽しめる物を生み出すのが大切なんです。君はまだ学生ですけど、きつといい社会人になりますよ」

まるで教師が学生を諭すように語られた田沼の言葉は、作家としては獨創性に欠け、彼の才能の限界を感じさせるものであったが、Qにとってはなぜか引っかけりの多い言葉であった。

「田沼さんは小説を書いている。社会人として立派ですね」

「うん。ありがとう。」

田沼は笑みを浮かべたが、すぐさま深刻な表情を浮かべた。

「だけどね。私の小説はトラブルが多いのですよ。この間も政治結社を名乗るくだらん団体か

ら脅されましたね。要は暴力団の類ですよ。これ以上書くなら最悪の結果もありえるぞって。だけど私は負けませんよ。今度は実名をちゃんと書いた作品で、不正をとことん追求しますよ」

結局、田沼は脅しに屈しない自分の社会派作家としての覚悟をQに自慢しただけであった。しかし田沼の語るくだらん政治結社とはすなわち今回の依頼者であり、和泉夫人とその配下の取引先でもある。Qはぎこちない笑顔を田沼に向け、なにも言葉を口にしなかった。

結局十時まで、三時間に渡ってQと田沼は語りつづけ、締め切りがある。と言い残し田沼は先に店を後にした。一人カウンターについたまま、ぼんやりと考え事をしていた。それはこれまでの仕事でQが深く考えたことのない、田沼という人物に対する仕事の依頼経緯であった。

和泉夫人には、先ほどQを車で迎えた男や自

宅に石を投げ入れた者のような、実際に仕事の遂行はしないがその周辺に携わる人物が何人かおり、その総数は彼女が抱える仕事の遂行者よりはるかに多人数に及ぶ。その中でもとりわけ重要度が高いのが、検死官である岩佐宗治と、普段から政府筋や暴力団、政治結社に出入りをする営業とも言える存在の中野恭輔である。

この両者とQは面識こそないが、その名前は父や和泉夫人から何度も聞かされている。前者は仕事の後、後者は前において重要な役割を果たし、今回の仕事も中野が某政治結社と日常的に酒を飲んでいる席で交わされた会話によって発生したものである。依頼理由は田沼が月刊紙で連載中の企業小説「腐敗の夏」の内容に起因する。これは総会屋と企業間の癒着をテーマに、ルポライターがその真実を追究する、といったありふれた内容のものであるが、連載が進むに

つれ、当初フィクションであった企業や人物の固有名詞が現実の名前、つまりその政治結社と関係する企業の実名に近づきつつあり、それどころか、今後予定されている株主総会での政治結社の行動や、企業間との裏取引がどのようになされているかまで、取材と予測を含めた暴露で綴られ、少しずつではあるが、世間の反響を呼びつつある限りなく現実に近い物語であった。

これまでの関係の暴露であれば、依頼者も動くことはなかったが、今後のことも含まれているとなると、具体的な利害が生じる。以前から政治結社も田沼には脅しをかけていたが、自身の行為を英雄的なそれと照らし合わせている彼は一向に筆を緩める気配を見せない。月刊紙の出版社にも圧力をかけてはいるが、そもそもその出版社自体、別の政治結社の後ろ盾を持ち、あまり恫喝も効果がなく、下手をすれば政治結

社間で抗争の火種を生みかねない。

しかも田沼がそもそも取材した情報のソースが自分たちの構成員からであるという事実が相手企業側に発覚し、政治結社としても仕事に支障がきつつある。無論、その構成員は政治結社内では始末をしたが、田沼は身内ではないため、手の出しようもなく困った事態になっている。

もつとも、それだけの理由で彼らが最終手段に訴えることはまずありえないのだが、実績を主張し、それを安全に遂行できるという誘いがあれば断る理由もない。恫喝に関連し、警察が自分たちに嫌疑をかけたところで実行犯の顔も知らない彼らにとって、事実の隠蔽はたやすい。レポートの内容と、父や和泉夫人から聞かされていた、この業界の仕組みを照らし合わせつつ、Qはそんな考えをまとめていた。

つまり、田沼は自身が信じている正義的な行

動により、想像の範疇を越えた仕組みで最終的な制裁を受ける。本人もまさかそんな事態までは予測していないであろうが、しかしそれで生活をしているQたちような存在に目をつけられ、依頼者との利害が一致した結果が今夜決行される。それも田沼が気に入った若者によって。

Qは軽く混乱していたが、それ以上のことを考えるのを止めた。考えたところで今夜の結果は変わらず、田沼も無念であろうがそんな結果は事故や災害により、世間ではありふれていると聞いている。せめて仕事の遂行後、その著作でも読もうかと思ったQであったが、多分読むことはないだろう、興味のあるジャンルではないし、もし興味を持ったところで、永遠に新作が読めるわけもないからだ。

席を立ったQはレジで会計を済ませようとした。しかし、店員は自分の分も先ほど田沼が余分に

払っていったと告げた。これにはQも驚き、再び混乱してしまった。

僅かではあるが、酒を飲んでいたQの挙動は不確かなものであった。店を出てふらつきながら歩いていくと、やがて彼の眼前に田沼が宿泊するホテルが見えた。先ほどの居酒屋とは歩いて五分ほどの距離に位置する。これなら、あの店に田沼が来る可能性も充分あっただろう。しかしそもそも酒を呑まないQは、そんな想像すらしておらず、その結果がカウンターでの語りである。

田沼はQを好青年といたく気に入っており、下手をすれば自分の存在が田沼のペンを通じて世間に出る可能性が少ないながらもある。よもや自分が遂行しようとしている仕事をかれが見抜いているはずはないだろうが、今日は警官の登場といい、なにか予想できない不測の事態が

次々と発生しているため、Qは早めに仕事を遂行し、私鉄沿線の自宅へと戻ろうと決意した。

彼はホテルの正面玄関から側面に回ると、鉄製のタラップを足音も立てずに五階の非常階段口まで駆け登った。

ホテル内へと通じるドアノブに手をかけたQは、それをゆっくりと回してみた。すると扉はあっけなく開かれホテル内の空調音がQの鼓膜を小さく振動させた。まあこういったこともあるだろうと納得したQは、ポケットに突っ込んでいた手に握り締めた二つの鍵のうち、一つを放すと慎重に中の様子を覗いながら、靴を脱いでホテルに侵入し、後ろ手で扉を閉じた。

ホテルの床には黒ずんだ赤い絨毯が敷かれていて、壁も薄つすらと汚れていた。あまり贅沢な宿ではなく、殺風景ですらある廊下を、Qは素早くその長身を目的の部屋である五〇七号室

へと運んだ。潜入するQは何ひとつ物音も立てず、すでにアルコールの弊害は抜けきっていた。非常階段の扉を開けてからこの部屋の前までたどり着くのに、彼はなんの躊躇もなかったが、これも訓練された動きであり、第三者からの目撃を極力避ける理由があった。もちろん、その過程において、別の宿泊客が廊下を往来したり扉を開ける危険性もあったが、それに注意するより素早い挙動が目撃の可能性を低下させると教え込まれていた。

この扉の向こうに、あの田沼幸司がいる。寝ているのだろうか、それとも執筆中なのだろうか。わからないがいずれにしても、今から数十秒後にあの男は永遠に寝ることも書くことも叶わなくなる。そして自分は家に戻り、後日後金を受け取り、その帰り道で好きなソフトを買い漁る。一点の曇りもない、いつもの平和な日常

を手に入れるため、仕事は手早く済ませよう。そう思いつつQが鍵を使って扉を開け部屋に侵入すると、中は真つ暗であった。田沼は恐らく寝ているのであろう。そんな考えを強め、気配を殺しつつベッドへ向かったQであったが、皺もなくあまりにも綺麗にシーツが被せてあるそれには人の温もりもなく、夜目が利いてきたころには、部屋自体に田沼の姿も荷物もないのを認識した。

田沼幸司はすでにこの部屋から出ていった。考えられうる事態はそれしかなかった。だとすれば、一体どこへ行ったのであろう。やはり今回の仕事はなにか歯車が狂っている。これまでの仕事で、こんな事態は一度もなかった。Qは激しく混乱しつつ、ベッドを陰にしてしゃがみ込んだ。

Qは仕事を遂行し損ねた。こんなことは彼に
とつて初めての経験である。

翌朝、自宅の炬燵で寝ていた彼は、小さな物
音で目を覚ました。未曾有の事態に浅い眠りし
かしていなかったQは、だるい身体を無理やり
奮わせ、物音のした玄関までやってきた。玄関
には、新聞配達口から投げ込まれたであろう小
さな小石が落ちていた。和泉夫人からの連絡手
段であるそれは、いつもは階段の踊り場に投げ
込まれる手はずになっていたが、週末ではない
ため、昨晩から今日にかけ窓は閉ざされていた。
そのための緊急処置であろうが、とにかく昨日
からの異例づくめの連続である。

乱暴な挙動で小石を拾い上げ、書かれた文字
を読むと、それには「肆」とQがこれまで見た
ことのない文字が書かれていた。小石に書かれ

ている文字は、常に翌日の和泉低への来訪要求
を意味し、「壹」と書いてあれば連絡事項がある。
であり、「貳」ならば年中行事がある。であり、
「参」であれば仕事の依頼がある。である。し
かしこの「肆」という漢字は見たこともなく、
そもそもどう読むのかすらQにはわからない。
これも異例の事態である。すると、彼は玄関の
扉越しに近づく人の気配を察し、緊張を高めた。
「貞郎さん。私です。駒井です。踏み切り脇の
公園で待っています」

その声は男のものであり、音量は小さく、Q
にはどこかで聞いた覚えがあったが、駒井とい
う名前に心当たりはなく、どうしたものかと思
案していると、扉の向こうの気配はやがて消え
た。仕方なくQは二階から絹布を持ってくると、
それを右手に巻き、取り敢えず近所の踏切まで
行くことにした。

小さな箱庭のような公園が、踏み切りのすぐ側にあった。この公園はQも幼いころ何度か訪れた記憶があったが、普通の児童が遊ぶという目的ではなく、父から暗殺の屋外訓練を受けるためがほとんどであった。いつも弁当を買うコンビニエンスストアのちょうど真向かいにあるのだが、ここ数年はその存在すら意識したことがなく、久しぶりに認識した公園は、幼いころのままであった。

その公園の入り口に、紺色ののセダンカーが止められていた。Qをいつも殺害現場に運ぶ車と同じ車種である。よもやと思い、Qがスマートフォンのかかった前部扉の窓から様子を覗おうとすると、それより一瞬早く後部扉が開き、運転席からいつもの運転手である中年男性がヤニ色の歯を見せ、笑顔をQに向けた。意図を察知したQは後部座席に滑り込み、小さくため息をつい

た。

「困るなあ貞郎さん。よんのときは、待ち合わせ場所を書いて、外に投げてくれなきゃ」

そう告げる運転手の声は、先ほど扉越しで聞いたものと同一であった。そうか、いつも自分を現場まで運ぶこの男は、駒井というのか。Qは間抜けな感想を抱いたが、それと同時に不快にもなった。

「よんて読むんですか…初めてで、知りませんでしたよ」

「あれ？ お父様から教わりませんでしたか？」

教わったかも知れないが、父から伝授された知識は膨大であり、ここ十年のうちに、普段使わないものは大分忘れてしまっている。Qの驚異的な記憶力は、そうした昔の事柄を記憶層の

奥にしまい込むことにより成立し、不測の事態における連絡方法である「肆」などは、まるで認識外にあった。

「とにかく、どうしたんです？ 早起きして朝刊見たんですよ。そしたら田沼の記事は載っていない、調べてみたらまだびんぴんしている。どうしたんです？」

このような際の対話を、Qは持ち合わせていなかった。なぜ不愉快であるのか、その原因すらわからず、彼はありのままの事態を駒井に話した。

「部屋に居なかった…それで帰ってきたんですか？ へえ…」

駒井の口調は平然としたものであったが、Qにはどこか自分が馬鹿にされているような印象を受け、機嫌はますます悪くなっていった。

「なんであいつは居なかったんだ…」

思わず独り言を口走ってしまったQであるが、そんな冷静ならざるQに駒井は苦笑いを浮かべた。

「まあ事情は知りませんが…ですがラッキーですよ貞郎さん。田沼は今夜、作家仲間の出版記念パーティーに現れます」

Qは、駒井がなにを言わんとしているのか、その意図を把握できないでいた。

「そんなのじゃ、できないよ」

いつもは年上に対して敬語を使っていたが、つつい独り言の延長で、Qは生の言葉を口にしてみたい、しまったと口を軽く手で抑えた。

駒井から見て大した事実はないが、こんなイレギュラーこそがQの嫌う波風であった。

「そりゃパーティーは人も多いですし、目立った場ですが、かえってトイレとかでやるチャンスは多いですよ。それに酒が出ますから、後を

つけてりや絶対隙もでます。パーティーのあとなら、確率もグッと増えますよ」

まるでギャンブルを楽しむかのように、駒井はそう言った。しかしQにその言葉を吟味する心の余裕はなく、とにかくどうすればいいかと途方に暮れてしまった。駒井はQの弱気を見て、言葉を雨のように降らせた。

「明日になれば、田沼は取材で長野にいつちまいます。四日は帰らないそうですから、期限を過ぎますぜ。まさか出張仕事ってわけにやいかないでしょ。東京を出れば岩佐先生もいない。こりやつまり、検死で足がつく性能がある。わかってるでしょ？ 岩佐先生が和泉の奥様と懇意だからこそ、多少の無茶ももみ消すことができる。だけど長野じゃ、こりや最悪ですぜ」

「わかってる。わかってるよ」

乱暴な口調でQは言い捨てた。人の弱気を見

抜き、調子に乗る駒井というこの男を、Qはいままでよりずっと嫌いになったが、彼との接触を最小に食い止めるためにも、今夜仕事を決行しなければならぬ。そう自分に言い聞かせる。Qは幾分冷静にもなった。

「じゃ、これがホテルの見取り図です。あと、これは田沼が作家仲間とよく呑みにいくクラブの会員証と見取り図です。一応渡しておきます」

Qは駒井から封筒を受け取ると、すぐにそれを開け、ホテルの図面を開いた。

「しかし…居ないから、帰るねえ…」

駒井のそのつぶやきに、Qの冷静さは逆転し、彼の頭は熱くなった。小さいつもりで打った舌打ちは思いのほか大きく、車内に不愉快な音が響いた。駒井はQの行為に笑みを消し、無言で彼を睨みつけた。そもそもQの失敗により、今夜の田沼の動向を調査し、ホテルの図面はおろ

か、クラブの会員証を用意したのは駒井とその仲間である。手際は完璧で、不測の事態にも充分対処している駒井は、Qに嫌味の一つでも言っていないはずである。睨み付ける駒井の眼光からそれを理解すると、Qは凶面を畳み、うなだれ、今度は小さく舌打ちした。Qが車から降りようとすると、駒井は再び笑みを浮かべた。

「貞郎さん。明日の朝刊、楽しみにしてますよ」

「あ、ああ…」

小さく、低い声でQは返事を返すと車を降り、なぜこんな無様なことになったのだろうかと考えてみた。やがて駒井の車は走り去っていたが、今度ばかりは考えることを止めず、空を見上げ思考を整理していた。しかし、結論は出ず、結局あの夜、田沼が部屋にいれば今ごろ後金を受け取り、繁華街へ買い物に出ているであろうという、まるで建設的ではない後悔の念だけが意

識を支配しつつあった。そんなQだから、真向かいのコンビニエンスストアからゴミ箱の中身を回収しに出た、店員の湊にもまるで気付かず

にいた。
湊は、いつもの常連客が公園でぼうっとしているのを可笑しいと観察し、しばらくゆるい笑顔を向けていた。踏み切りから警告音が発したことで、Qの思考は現実へと引き戻された。それと同時に彼は自分を見つめる視線を感じ振り返ったが、湊の姿はすでに店内へと戻っていて、彼の背後を急行列車がけたたましい騒音を上げ、通過した。

駒井の段取りに従うのはQとしても不本意であったが、どう検討しても、田沼への仕事の遂行はパーティー会場が最も安全であると判断してきた。自宅に戻ったQは炬燵の上にホテルの凶面を広げ、印の付けられたパーティー会場とト

イレの位置を確認した。パーティーが終わった後の田沼の行動は、前回の例もあって予想がつかない。

現時点ではつきりしているのは、今夜田沼がパーティーに出席するという事実だけである。それすらも不確定要素に満ちてはいるが、今は彼が予定通り出席するのに期待するしかない。

そんなことを考えていると、Qはそもそもあのカンヅメ先のホテルに田沼がいるはずであるという昨夜の確信も所詮は期待でしかなく、今までの二十二件の仕事もそんな完全ではない予測がたまたま上手く行っていただけだと判り、つまりこうだと、例えば相手に攻撃が命中する確率が存在しているがそれは画面に表示されておらず、たまたま九十%を超えていたため、まるで100%確実に当たっていたと勘違いしていた、ゲームなどでもよくある出来事だと考えを深め、

そんな自分に吹き出してしまった。

昼過ぎ、Qは床屋に行き、何年も不精で伸ばしていた髪をばつさり切り下ろさせた。オールバックで平凡な髪型になっており、普段決して切ることができない分量の頭髪を見下ろしている床屋の店主は妙に満足そうであった。鏡に映った自分の顔を見たQは、まるで別人で、いまままでよりずっと普通だと感じた。これならパーティーという公の場でも、あまり目立つことはないだろう。目撃される可能性が高い場所ですべての長髪では不必要に他人の印象に残ってしまう。ましてや田沼は自分の顔を知っている。となると、この程度の予防策は当然だろう。それはQがこれまでに行ったことがない、独自の発想による仕事の仕込みであった。いったん自宅に戻ったQは、不慣れな手つきでマニュアル本を読みながらネクタイを締め、

これまで二度しか袖を通したことがない紺色のスーツに着替えた。着慣れていないため、多少の違和感はあるが、Qの姿はこれまでの浪人然としたものではなく、ごく普通の会社員のようでもあった。ただ一つ、持つている鞆が肩下げ式の、少々会社員には不似合いなものではあったが、Qの年齢の若さがそれを幾分和らげていた。最後に黒縁の、度が入っていない眼鏡を掛けたQは、二階の埃がかかった姿見で自分の変装を再確認し、高揚するものを感じていた。

パーティー会場がある都心のホテルに向かうため、Qは私鉄の準急列車に乗り込んだ。平日の上り方面列車はどの車両もがらんとし、彼はいつものようにその長身を小さくして隅の座席に腰掛けた。一体、どのような手はずで仕事を遂行するか、そんなことを思索していると、Qは浅い眠りに落ちた。

眠りの中、Qはある住宅街にいた。いつか訪れた記憶のある、そんな住宅街であったが、具体的には思い出せず、静かで人気がない路地を、彼は何かの目的意識に駆られて歩いていた。

目的とは仕事の遂行である。Qは仕事の依頼を受け、それを果たすためにこの住宅街に来ていた。これが夢であるという自覚は未だなく、なぜだか焦りを覚えたQのはるか眼前に、犬のような生き物がぼつりと佇んでいた。

犬のようなそれは、近づくにつれ、より具体的な姿をQに示した。よく認識すると、黒の中型犬である。この犬を、Qはよく知っていた。

「なんだあ…お前、生きてたのか？」

犬の前で立ち止まったQは、ゆっくり身を屈めると、犬の頭を撫でようとした。しかしその瞬間、犬は突如として四肢をびくつかせ、口からは泡を吹き出した。見開いた瞳孔には、まだ

幼いQの姿が映りこんでおり、それを認めたQは上体を起こし、犬からゆっくりと離れた。

「ジョン…ジョンだよなあ…」

Qはうめきつつ、この黒い犬がゆっくりと死んでいくのに怯えた。すると、言葉にならない感覚が、彼の気持ちに鋭く侵入してきた。

苦しい。苦しい。いやだ。いやだ。

単純なキーワードの羅列であるそれは、おそらくジョンとこの黒犬の、死に際しての苦痛を表現したものだろう。なぜだかQには、それがはっきりと認識できた。やがて黒犬の痙攣は止み、風景は静かになった。

目を覚ましたQは、電車が終点で停車していることに気付いた。大量の乗客が車内に入り込んできたため、彼はふらふらと電車を下り、ホ

ームで細かく呼吸を整えた。先ほど見た黒犬の死の光景が、Qの脳裏にまだ鮮明に残っていて、あれが夢であったことをようやく自覚した彼は、定まらない視線を駅の構内に泳がせていた。あの犬の名前はジョン。訓練の課題として、Qの父親が彼に仕事の遂行を命じた犬である。Qにとっては初めて命を奪った生き物であり、痙攣して死んでいく様は、まさしく二十年前に少年であった彼が行った仕事の光景である。しかし、その時にはあのようなキーワードは聞こえておらず、ただひたすら、犬が絶命するまで自分が必死であった記憶しかない。それがなぜ、いまになって鮮明に、あのような声が聞こえたのだろうか。あれはまるで、死に逝く犬の気持ちそのものではないのだろうか？ そんな混乱をしながら、Qは腕時計に視線を移した。時刻は夕方五時。もうパーティーが始まる時間である。

不可解な疑念をいったん記憶層の隅にしまい込んだQは、地下鉄駅へと向かった。

夕方、都内の高級ホテルの二階で、とある作家の単行本出版記念パーティーが催されていた。この小説は、すでに大手映画会社による映画化が決定済みであり、このパーティーの主催もその映画のスポンサーであった。パーティー会場には百人を越える招待客が招かれ、その中には作家とは数十年來の友人である、田沼幸司の姿があった。壇上には、やはり作家の友人であるプロ野球選手がジョークを交えつつ祝辞を述べ、場内は枯れた笑いに包まれていた。華やかな場所ではあったが、田沼の表情は険しく、恐らく彼にとってあまり愉快な席ではないのだろう。小柄な体躯を壁にあずけ、一人シャンパンをグラスを傾けながら、パーティーの空気と自分の間に一定以上の距離を保とうとしていた。

そんなパーティー会場からやや離れたロビー奥には男子用トイレがあり、大使用の一室にQの姿があった。

果たして、田沼をどうやってここまでおびき出すか、Qの考えはそれ一点に集中していた。田沼が一人で、それも大きい方の用を足しに来る可能性は予測不可能で、もしそうなれば幸運であるが、そうするための手立てを彼は考える必要があった。会場に忍び込み、おびき出す方法をあれこれ思案してみたが、どうにもいい考えが浮かばない。そもそも、Qの仕事は駒井たちなどが現場をセッティングした上で実行するものがこれまでの全てであり、策を練るなどの行為には、あまり縁がなかった。しかし今回は、自分の力で状況を打開しなければならぬ。そんなことをQが考えていると、男子トイレの扉がゆっくりと開かれ、個室にいたQの緊張が高

まった。彼は鞆から、細い棒に小さな鏡を取りつけた道具を取り出すと、個室の扉の下隙間から、それで外の様子を覗つた。

男子トイレに入ってきたのは、灰色のスーツを着た、頭髪の薄い小柄な中年男性であつた。男は小便器まで歩くと、用を足しながら小声で独り言をつぶやいた。

「貞郎さんがいれば、聞いてください。田沼のシャンパンに下剤をまぜました。じきです。大きい方ですから、奴は一人でここに來ます。ネクタイをしています」

それは、Qに向けたメッセージであつた。彼はたまらず、個室から声をあげた。

「誰ですか？」

「奥様の下で働かせていただいでる、金田という者です」

金田と名乗る中年男性は、それ以上なにかを

告げようとしたが、男子トイレに別の男が二人ほど入ってきたためそれを諦め、入れ替わるように出ていつてしまった。

自分なりに策を練ろうとしていたが、Qの行動は駒井を通じて和泉夫人に伝えられ、やはり現場のセッティングはすでになされていた。Qは金田の言葉をそう理解し、安心するの同時に小さな不満を覚えた。

トイレにはもうQしかおらず、その個室の中で、彼は鞆から絹布を取り出していた。これはQの仕事道具であり、折つたり巻いたりすることとで、例えば電気コードのように、例えばベッドのシーツのように、例えばネクタイのように、様々な絞殺用具に形を模することができる。

この仕事は非合法法であり、その正体が判明した場合、Qも和泉夫人たちも法の元に裁かれる。あくまでも相手を自殺、もしくは事故、最悪で

も犯人不明の変死とさせる必要があり、ありふれた首吊り自殺に見せかけることができるQの技術は、現代において最も怪しまれ辛い殺害方法といえた。

金田の伝達から数分後、男子トイレの扉が乱暴に開かれた。田沼の拳動と確信したQは、棒につけた鏡で下から確認した。鏡には酒で朱になり、下痢で藍となった田沼の、まだらな顔色が映り込んでいた。田沼が個室に入り用を足すのをゆっくり待ち、それが果たされたことを確認したQは、素早く個室から出て男子トイレの鍵を内側からかけ、田沼の入っている個室の扉脇に背中を張り付けた。

やがて、しばらくした後、個室の扉が開かれ、中から疲れきった田沼が姿を現した。

田沼の目に、背中を向けた紺色のスーツを着た長身である男性の姿が映った。なぜこの男は

背を向けているのだろう。妙な奴だと田沼が思った瞬間、男の両手がゆっくり上がり、そこから細く巻いた絹布が伸び、彼の首に巻きついた。

Qは田沼と背中合わせになるように素早く体を入れ替えると、首に巻きつけた絹布の両端を一瞬で持ち替え交差させ、全力で引つ張った。田沼の身体はQの背に乗せられ、彼はたまらず両手で呼吸を圧迫する布を掴んだが、爪で破れることなく食い込んだそれは肺への酸素供給を遮断し続けた。田沼の浮いた両足がばたばたともがき、踵がQの両腿を激しく打撃した。しかしQのスラックスの内側には、硬質プラスチック製のプロテクターが装着されており、田沼の抵抗はQに達することはなかった。

対象を絞殺する際、暗殺者は背後から対象に接近し、ロープなどで頸部を巻きつけ窒息させるのが常套手段である。しかし、この絞殺技術

においてのみ長年の研鑽を重ねた中臣家には、背中を向けたまま対象の頸部を捕らえ、顔を見られることなく殺害する絞殺術の様々なバリエーションが存在する。

田沼の呼吸を止めている際、Qの頭の中は何の思考もなく、ただ真っ白であった。あと数秒すれば田沼の意識はなくなり、それは対象の死と、仕事の完了を意味する。ただひたすら、両腕に力を込め、前に屈めば全ては終わる。絞殺具と化したQは無表情で、顔色はいつもより青白かった。

苦しい。きつい。いやだ。なんで？

そんな言葉が、Qの脳裏に突き刺さり、その瞬間彼の意識は田沼へと向けられた。しかしうめき声以外は聞こえず、やがてそれも止み、田

沼の小柄ながらもたっぷりした体重が、Qの両腕にずしりと伝わった。

いまの言葉はなんなのだろう。そんな疑問を抱きつつ、Qは絶命した田沼の首と靴の踵を拭き、爪の間をプラスチック製の楊枝で掃除し、天井のパイプに田沼が絞めていたネクタイで、彼の身体を首吊り自殺のようにぶら下げた。やがて、田沼のスラックスの裾から、溜まっていた排泄物が流れ落ちた。Qは無表情に首を吊らされている田沼を見上げた。すると、絶命したはずの田沼から、Qの脳裏にある言葉が飛びこんできた。

あ……この間の学生さんですか……いやあ……やられちゃいましたよ。やっぱり書き過ぎちゃいましたかね。だけどもさか、本当に殺されるなんて…嘘みただよ。みともないですね…天井に吊るされちゃって。犯人は見つ

かりますかね？

それは、田沼の生々しい肉声であった。しかし何度見ても、田沼は白目を剥いて、足からは排泄物を垂らしながら絶命している。なぜこんな声が聞こえるのか、Qにはまるで理解できず、ただがたがたと震えるばかりだった。

心残りはいっぱいありますよ。まだまだ書きたいことは山ほどあるのに。誰か書き継いでくれないかなあ……だけども、僕のように殺されちゃいますねえ。

Qは耳を塞ぎ、心の中へと響くその声を遮断しようとした。しかし田沼の無念は響きつづけ、それを拒否しつづけるQは、やがてぶつぶつと独り言を始めた。

「あんたは死んだんだ。この俺、Qが殺したん

だ。誰もあんたの続きは書かない。警察は自殺で処理する。犯人はつかまらない。このQの仕事は完璧だ。怨むなら、Qが死んでからにしろ。そのときじっくり聞いてやる」

支離滅裂な言葉であったが、Qの思考は明瞭であった。田沼の声は止み、一瞬、彼の屍が微笑んだかのように見えたQは、男子トイレの窓から外へと逃れた。

作家の田沼幸司さんがホテルで自殺

一〇日午後六時三十分ごろ、東京都杉並区阿佐ヶ谷の作家、田沼幸司（54）さんが赤坂口イヤルシテイホテルのトイレで首をつっているのを、ホテル従業員が発見した。田沼さんは、病院に運ばれたが間もなく死亡が確認された。警視庁赤坂署は自殺とみている

調べでは、田沼さんは同ホテルで開かれていた知人である作家、石田明弘さんの単行本出版記念パーティーに出席しており、その最中に首を吊っていたものと思われる。遺書は見つかっていないが、連載中の小説「腐敗の夏」の内容に悩んでいたらしい。

田沼さんは、文政大学卒業後、日報新聞社に勤務、退社後は工場勤務などを経て、八十五年、ノンフィクション「料亭・日比野物語」でデビュー、九十一年には「シャトルスコープ」にコメントーターとして出演。鋭い社会批評などで評価を受ける。

翌日の昼過ぎ、Qは和泉邸に田沼殺害の後金を受け取りに来ていた。

「はい、これ。」

和泉夫人はテーブルに現金の入った封筒を置

いた。Qはそれを受け取るいつものようにポケットにしまい込み、ティーカップを手に取り紅茶をすすった。

Qの服装は、いつも訪れる際に着ている灰色のコートであったが、その長髪は見る影もなく、すっきりとした印象を和泉夫人に与えた。夫人はQに、なぜ髪を切ったのかと尋ねようとしたが、彼があまりにごくごくと紅茶を飲むので、しばしその様子を観察することにした。

「あの…」

ティーカップを置いたQは、珍しく自分から口を開いた。

「今回はすみませんでした。お手間とらせて…次からは、もっとうまくやります。」

Qの謝罪に、だが和泉夫人はなにも言葉を返さず、ただ柔らかな笑顔を向けるだけであった。

Qはそんな夫人に、なにか救われたような気が

し、少し甘えてみてもいいと思った。

「あの…えっと…あい…」

Qは、暗殺者が死者の声を聞くことがあるのか。そんなことを、この業界で大先輩でもある和泉夫人に尋ねようとしてみたが、だが思えば、あれは自分の弱気が生んだ幻聴だったような気もしてきたため、そんな恥ずかしい自分を晒すのはみっともなく感じ、質問を諦めた。

「髪：長いほうが好きだけどなあ」

和泉夫人は、ゆっくりとそうつぶやいた。Qは頭を軽く掻き、赤面しながら小さく「伸ばします」といつて席を立った。

玄関では、和泉家の使用人であるエプロン姿の若い女性が、Qのスニーカーを揃えていた。

「あれ、もう帰るの？ 早いね」

女性はぶつきらぼうにQに言い放った。

「長居は危険だよ。特に仕事の翌日は、誰がこ

の家を見張ってるかわからない」

Qの口調は穏やかであり、言葉はこの業界で働く者であれば当然の内容であった。そんなQが意外で、女性は丸い目をいつそう丸くした。

「まあ…そりやそうよね」

スニーカーを履きながら、Qはこの使用人の女性が案外素直で、やりとりさえ間違わなければ不愉快にならずにすむ相手だと思え、初めて彼女と出会った、自分の少年時代をふと思い出し、苦笑いを浮かべた。

「後金で、アニメとかゲームとか買っんでしょ」
数日前に来た際と、同じような言葉を女性は告げたが、言葉に陰は込められておらず、むしろ女性らしい、いたずらっぽい邪気に満ちていた。

「ね、最近はどうなゲームやってるの？」

「ん？ 君に言ってもわかんないような奴ばっ

かだよ」

「女の子に告白するゲームとか?」

「そ、そう、そんなの」

「へえ…ねえ、わたし、最近MISTYってゲ

ームやってるの。だけど全然先に進めないのよ」

「ああ…あれね。あれは難しいって雑誌にも書いてあったよ」

「貞郎さん、やった?」

「いいや。」

和泉夫人との客間でのやりとりより、玄関での女性とのそれは数倍の時間にも及び、Qは高揚した気分で和泉邸を後にした。駅に向かって路地を歩いていくと、ある一匹の犬がQの視界に入った。茶色く、玄関に鎖で繋がれている中型犬であった。Qは穏やかな表情でその犬を見下ろし、しばらく眺めていた。

和泉邸から自宅への帰り、Qはいつもの繁華

街へと寄ったが、購入したのは「MISTY」というゲームの攻略本のみであった。私鉄駅を降りたQは自宅へと戻る途中、コンビニエンスストアに寄った。

レジでは、湊店員と男性の店員が談笑していた。Qの入店に気付いた二人はすぐにレジに戻り、いらっしやいませ。と当たり前前の挨拶をした。そういえば、この二人の店員は同い年ぐらいなんだよな。そんなことを思いつつ、Qは弁当とお茶を購入し、店を出た。

自宅近くのゴミ捨て場では、まだ回収されていないゴミ袋が堆く積まれていた。Qがふと注意を向けると、いつかの黒猫が袋の隙間から姿を現し、Qを不審そうに睨み付けた。強い警戒と僅かばかりの期待を猫の瞳から感じたQは、素早い挙動で小さく黒く、ふさふさしたその生き物に接近し、ゆっくりと抱きかかえた。黒猫

はじたばたとQの腕の中で抵抗したが、やがてそれを諦め、じっと彼を見上げた。

この黒猫を飼ってみよう。近くに居てもらおう。後でペットフードを買いに行こう。そんなことを考えながら、Qは線路側の自宅まで歩き出し、彼の前を急行列車がいつものように騒音と振動を撒き散らしながら通過した。

終